

対話形式導入による哲学講義改造の試み

佐野 之人

【要旨】

哲学教育における第一義は学生が自力で哲学することができるようにすること、このことは動かないと思う。学生が自ら哲学的な問いを立て、これを自ら、あるいは対話を通じて哲学することを通じて、自分なりの答えにたどりつくことができるようになること、これが到達目標である。これを「講義」および「演習」という授業形式の中でどのように達成していくか、これが目下の課題である。現在のところ私は講義とは「教員が研究に基づいて自説を積極的に展開する場」、これに対し演習とは「学生が研究に基づいて自説を積極的に展開する場」というように理解している。このような講義の形式において、上の到達目標はいかにして達成可能となるのだろうか。

以下に述べるのは平成23年度後期の初等科社会における講義（3回分）の報告である。第1回目の講義では必修ということ、ただ何となく出席している学生を「哲学する」態勢に導くこと、そのための導入を行った。ここでは3つの戒め（教わる気になるな！」「分かった気になるな！」「前提を問え（前提に無批判になるな！）」と、1つの誓い（考えることから逃げない）の説明を行った。次に「はじめまして。私は佐野之人です」という、この講義の冒頭の言葉を実際に共に哲学した。「初めましてとは何か？」「初対面の際の挨拶の言葉である」「それでは「対面（出会い）」とは何か？」「挨拶とは何か？」「私とは何者か？」こうした問いについて対話を交わしながら共に考えていくことで、学生に「哲学すること」の体験をさせること、これが次なる目的であった。そうした体験の後に、「初等科社会に哲学は必要か」という問いを投げかけた。この問いを通じて哲学と人間、哲学と子供、哲学と自分との関係を考えさせるためである。

第2回の講義では、前回の講義に対する学生のコメントを紹介し、その中から学生に自ら「哲学的な問い」を見つけ出すよう指示した。これはグループディスカッションで行い、その中から全体討論のテーマを多数決で選出した。選出されたテーマは「生きる意味はある？ yes/no」であった。第2・3回の講義を通じてこのテーマで学生は対話しながら哲学をしていく。その流れの中で、教員が自ら哲学したことを、あくまで一つの説として紹介し、その後のレポートにおいてさらに学生が各自の哲学を展開する、こうした対話を導入した講義の在り方というものもあってもよいかもしれない。

対話形式導入による哲学講義改造の試み

佐野 之人

はじめに

哲学教育における第一義、すなわち最も大切なことは、学生が自力で哲学することができるようになること、このことは動かないと思う。学生が自ら哲学的な問いを立て、これを自ら、あるいは対話を通じて哲学的に考察していくことを通じて、自分なりの答えにたどりつくことができるようになること、これが哲学教育の目指す到達目標である。これを「講義」および「演習」という授業形式の中でどのように達成していくか、これが私にとっての目下の課題である。現在のところ私は講義とは「教員が研究に基づいて自説を積極的に展開する場」、これに対し演習とは「学生が研究に基づいて自説を積極的に展開する場」というように理解している。このような講義の形式において、上に述べた到達目標はどのようなにして達成可能となるのだろうか。

以下に述べるのは平成23年度後期の初等科社会におけ

る講義(3回分)の報告である。この中で私が何を意図し、何を経験し、どのような反省をしたか、それを振り返って考えてみたい。このような報告が可能になったのは私のゼミ生である山口大学教育学部3年生藤本航平君が自主的にTAとして講義に参加し、詳細なノートをとってくれたおかげである。この場を借りて感謝の意を表したい。報告とはいえ、今述べたノート、配布資料及び私のノートと記憶に頼る以外にないのだから、もちろん十分なものとは言えない。現在の視点が入り込んでいることは言うまでもない。しかしできるだけそうした視点は区別して叙述することを心掛けたい。

第1章 平成23年12月6日(火) 第1回講義

いつも通り、机の上の整理を命ずる。必要のないものは仕舞い、必要なものは出す。鞆は机の上に置かない。そうした整理と共に心の準備をするように指示する。こ

の作業は私にとって不可欠だ。そうしなかった時に比べ
てはるかに授業にスムーズに入れるという経験があるか
らだ。さて準備が整ったところで、

「こんにちは」

と挨拶する。挨拶が返ってくる。私は「うれしいですね。
挨拶が返ってきて」と言う。学生は何のことか分からな
い様子。構わず評価の仕方を説明する。最後のレポート
が6割、受講態度が4割だ。毎回出席カードを兼ねたコ
メントカードを配布するから、それに学んだこと、考え
たこと、質問を記述するように指示し、それが受講態度
の評価に含まれることを説明する。一通り事務的な説明
を終えた後で、

「改めまして、始めまして。私は佐野之人です」

と挨拶する。何の変哲もない、当たり前の挨拶だ。しかし、
この当たり前のところを当たり前としてやり過ぎすところ
に哲学はない。その前に彼らは「教わる気」になっ
ている。そこを何とかしなければならぬ。「初等科社会」
は彼らにとっては必修科目だ。落とすわけにいかない。
彼らの頭の中にはまず「単位修得」という文字が大きく
書かれてあるはずだ。評価方法はすでに述べた。しっか
りと出席し、教員の教える内容をしっかりと理解し、レ
ポートをしっかりと書けばよいのだな、そう思っている

はずだ。そこでいつもの「3つの戒めと1つの誓い」を
板書することになる。

第一の戒めは「教わる気になるな！」である。私の専
門が哲学であることを知っている学生が少なくなかつ
た。どうやら事前にアナウンスがあったようだ。しかし
私はおよそ次のように言った。

「私は何も教えない。と言うより何も教えることはでき
ない。何も知らないからだ」
学生はびびくりしている。

「では何でここに立っているのか、と言いたそうだね。
私が教えることができるのは哲学ではなく、哲学する
いうことだ」

若干の説明を加えると、学生は何となく分かったとい
うような顔をする。そこですかさず第二の戒めを板書する。
「分かった気になるな！」

分かった気になっているところに哲学するという営みは
ない。「哲学する」と言うことでさえ決して我々は分か
てはいない。大切なことは分かった気になっている、そ
の前提を問う、ということなのだ。そこで第三の戒め。

「前提を問え！」戒めの形にするならば、「前提に無批
判になるな！」となる。これを板書し、ほぼ次のような
説明を加えた。

対話において大切なのはまず相手の話に聴き入ること、聴き入るとはその根本に聴き入ること、ついでその中で頭わになつて来る根本的な前提を問うことである。このように聴かれることを通じて話している側も自らの前提を問うことになる。目は自分の目を見ないように、自分の前提というのは最も見えにくいものである。しかし自分の前提を問うということは自分自身の根底が揺らぐこともある。その意味で哲学することは危険を伴う。例えば我々は通常自分の生きる意味をどこかで確信して生きているが、それを問うことによつて、こうした確信が揺らぐことになる。ここで哲学することをやめてしまうこと、これが哲学することに伴う最大の危険だ。そこで一つの誓いを立ててもらう。

「考えることから逃げない！」

考えることは苦痛を伴う。分らないということはいからだ。しかしその分かつた時の喜びもまた大きい。だから「分らない」ということは哲学する上で一番おいしい所、醍醐味なのだ。誰もが空腹のときに特上の料理を食べることが最高だと言うだろう。それと同じことだ。このように励ます。そうしてまたその「分かつた」所を「分かつた気にならずに」さらに問う。哲学するとはどこまでも続くこうした営みに他ならない。

このように3つの戒めと1つの誓いの説明を一応終えた後、改めて「はじめまして。私は佐野之人です」に立ち返る。どの程度このテーマに関わるかは学生との関係で決めることにしているが、哲学することを教える以上、ここを何事もなかったように過ごすことは決してできないと思つている。人間が当たり前のようにして日常行つていること、その一つ一つが重大な哲学的な問いである。ここを迂闊に見過ごさせてはならない。

「はじめまして。私は佐野之人です」このように板書して、「はじめまして」とは何だろう」と学生に尋ねる。案の定、びっくりしている。当たり前すぎて考えたこともないからだ。

「挨拶です」と学生。

「どのような挨拶だろう」

「初対面の時に交わす挨拶です」

「では対面とはどういうことだろうか。私は下関から電車で通つていて、毎朝大体決まつた人を見ている。おそらく諸君より何度も顔を見ている。私は彼らと対面しているのだろうか」

「していません」

「何故かね」

「言葉を交わしていないからです」

「なるほど。決まった言葉やお辞儀をするといった動作を伴った挨拶を交わさないと対面していることにはならないと」

「そのようにしてお互いが認識し合うことが対面だと思えます」

「しかし挨拶を交わしたくらいでそれほどの違いがあるのだろうか。私は君と本当に出会っているのだろうか。私が作った君のイメージと対面しているにすぎないかもしれない。これで本当に対面していると言えるのだろうか。この問いは数十年一緒に暮らしてきた家族と本当に一度でも出会ったことがあるのか、という問いに発展していくだろう。さらにそもそも人間は一人で生まれてきて、誰と出会うこともなく生き、そうして一人で死んでいくのではないか、という問いにもなるだろう。しかしこれは真理の一面でしかないだろう。人間は縁がなければ生まれて来ること、生きることも死ぬこともできないからだ。ここをどう考えるか」

おそらくこのような内容のことを机間を歩きながら話したように記憶している。今回対面（出会い）に関しては、それがいかに深くて難しい問題を含んでいるかに気付かせるだけに止めた。次は「挨拶」だ。これがいかに重大

なものであるかを学生に気付かせたい。

「挨拶の中で何が起こっているだろう。それを考えるには挨拶が返ってこなかったらどんな気持ちになるかを考えてみるというかもしれない。どうですか？」

「寂しい」

「そうですね。はじめは『気が付かなかったのかも』って思うよね。だけど明らかに気付いているとしたら、『何か悪いことをしたかな』って思いますよね。でも自分が大切だと思っている人がずつと挨拶を返してくれなかったらどうだろう。一生誰からも挨拶を返してもらえなかったらどうだろう。そんな人生、耐えられるだろうか」

「耐えられません」

「ところでこのような挨拶をするのは人間だけだと思うのだが、この間の教員免許更新講習の時に受講者の先生方に訊いたところ、動物も挨拶すると言うのだ。君たちはどう思う？例えば犬は挨拶すると思いますか？挨拶すると思う人」（多数挙手）

「していないと思う人」（なし）

「犬が挨拶すると思う人。どうしてですか？はい、その手を挙げた人」

「犬同士だとお互いに臭い合うし、人間だと尻尾を

振つて寄つて来るから」

「それが挨拶なのかどうかは犬に訊かなければ分からないけれど、仮にそれを挨拶だとすると、人間の挨拶との違いはなんだろうか」

「言葉を使うことです」

「それに決められた動作、お辞儀するとか、握手するとか、頬ずりするとかいろいろあるよね。犬が尻尾を動かすのは決められた動作かな？」

「感情の動きだと思います」

「どのような？」

「ご飯を食べたいとか、散歩に行きたいとか」

「え、本当にそうなんですか？あんまり可愛くないな」

他の人どう思います？」

「会えてうれいという感情だと思います」

「私もそう思いたいですね」

「人間の挨拶の場合どうだろう。挨拶は人間にとって極めて重要だということがさつき確認されたけれど、言葉や動作を通じた挨拶の中でいったい何が起こっているのだろう。貴方、どう思います？」

「人との繋がりができていると思います」

「繋がりととは？一心同体になるわけではないだろう」

「仲間として認め合う関係だと思えます」

「つまり違いを認め合いながら、その人を仲間として認め、認められるという関係のことだね。そのように認め合うということは、存在を認め合うということだ。存在を認められるということは自分の存在を自ら確認するということだ。仲間としていい存在だということを確認するということだ。これと反対に、挨拶が返つてこないということは、少なくともその人間関係において、自分はその存在を認められていないということ、言い換えれば、自分はいなくてもいい存在だということ、いてはならない存在だということ、自ら確認することになるのだ。これが自分が大切だと思つている人間関係で、あるいは生涯にわたつた人間関係で起こつたらどれほど深刻なことか分かるだろう。ところで今言つたことからすぐに分かるように、挨拶は返す方よりする方がリスクを負つている。返つてこない恐れがあるからだ。そこで挨拶を円滑に行わせるために実生活では挨拶を先にするのは、目下（めした）の者からということになっている。こう考えると挨拶というものは随分と殺伐としたものだということになるね。挨拶つてこういうものだろうか。一番いい挨拶とはどのようなものか考えてみよう。一番いい挨拶つてどういう挨拶だろう。はい、その方」

「会った時に反射的にする挨拶だと思えます。見た瞬間、リスクとかそんなことを何も考えずにする挨拶です」

「会えてうれしいって思つてする挨拶だね。これが人間の挨拶の理想だと。だとすると一番いい挨拶をしているのは犬だということになるね。人間の理想が動物の生き方にあるというのは、挨拶に限らない。この間湯田温泉駅の待合室で飼い主のおじさんに抱えられた犬(ダックスフント)が、売店のおばさんに食べ物をもらつて食べていたんだが、本当においしそうに夢中になつて食べていた。人間はなかなかああはできない(家内は私もよく似た顔で食べていると言つていたが)。動物はひたすら生き、ひたすら死んでいく。ただ生き、ただ死ぬ、これが人間にはできない。その意味でも動物の生き方は人間にとって理想なのだ」

TAのノートと私の記憶によれば、ほぼ以上のような対話がなされていたと思う。ところで挨拶についても今回は何気なくしている挨拶の重大さや、奥深さに気付いてもらうということでもよしとした。次は「私は佐野之人です」を問題にしなければならない。

「次に『私は佐野之人です』だが、私は『佐野之人』ではない」

いつもながらやはりきよとんとしている。

「『佐野之人』は名前にすぎない。私は名前ではない。仮に名前が佐野「乏」人にかわつたら(そんな名前はあるはずないから、似ているけれど間違えないでほしい、という注意は与えておく)、私は私でなくなるのだらうか。そんなはずはない。では私とは何だらう。もし誰かがここには入つてきて『貴方は?』と訊かれたら『教師です』と答えるだらう。同様に君たちも『学生です』あるいは『受講者です』と答えるだらう。もし君たちが店でアルバイトをしていたら『店員です』と答えるだらう。とすると人間はその都度何らかの役割を演じようとしているのかもしれない。だが、役割が私だということになるのだらうか。それとも役割ではない裸の私が存在するのだらうか。私とはなんだらうか。どうですか? だんだん哲学はアブナイつてことが分かつてきたでしょ? ではここで今日最後の質問です。皆さんはここまで哲学するということがどういうことかを体験できたと思えますが、このような哲学を初等科社会でやる必要があるのでしょうか。普通に考えたら、小学校の社会科で哲学や倫理を教えることではないのだから要らないですよ。必要ない、というのであれば私は『ごめんない』と言つて帰ります。必

要ない、とは面と向かって言いにくいだろうから、これはディベート形式にしましょう。本心では必要だと思っけていても不必要派を演じてみようという人もヨに挙手してください」

大体そのようなことを言っけて「初等科社会に哲学は必要である。yes / no / どちらでもない」と板書する。しばらくして

「それでは訊きます。初等科社会に哲学は必要である。ヨだと思っける人、挙手してください」（多くの学生が挙手！）

「それではヨだと思っける人」（こちらは少数派）

「どちらでもないと思っける人」（さらに少数）

TAのノートにはいくつかの意見がメモしてあるが、私の記憶も補っけてみると、必要ないと考る根拠には、小学生には内容が深すぎる、考えすぎてしまう、経験上生きていく上で全く必要がない、などが挙がっけていた。どちらでもないと思る根拠には、小学生には必要ないから初等科社会には必要ないが、教師には必要だというものがあった。必要だと考る根拠には、小学生の方がむしろ何故だろう、何だろう、という探究心がある、というものがあつた。生きる意味などの深刻な問いではないような、小学生向けの哲学がありうると言っけるのである。

また小学校の教員は教科だけではなく、子供が生きていく上での指導をしなくてはならないから哲学は必要だ、とする意見もあつた。

気が付いたら「先生。時間です」と言われていた。あわてて出席カードを兼ねたコメントカードに今日学んだこと、考えたこと、質問等を書いてもらう。書けた者から順に提出して今回の講義は終りとなつた。以下は第1回講義に関する学生のコメントとそれに対する私のさらなるコメントである。これは第2回講義で資料として配布する。

平成23年度第2回初等科社会資料

皆さん、哲学にとても好意的でびつくりしました。コメントの一部を紹介しましょう。

1. 「まず挨拶でこんなにも話題が広がるのがすごい。さらに最終的によい挨拶に近いのが、挨拶をしているのかよく分からない犬の挨拶かもしれないという結果に驚きました。」
「今日の講義を聞いて、自分が日常している行為にどんな意味があるのか、何故その行為をしているのかについて深く考えてみようと思っきました。」
「人生は不思議で面白い！深く考えてみると今まで生活して感じたことや不安になつたことが何故そのように感じたのかが分かりました。」
「挨拶の考え

方が変わりました。」…根本的な気付きや理解の転換も哲学の特徴です。「物事の根本を辿ることは脳をフル稼働させると分かった。」…お疲れ様。「もつと深く考えたいです。」「始めに哲学と聞いて、堅苦しいなと思ったが、『挨拶』、『私』など深く考えていくうちに、もつと考えてみたいという興味が湧いてきた。」…頭が痛くなるのも、もつと考えたくなるのも哲学の特徴です。「何も考えてない軽い人間にはなりたくないからしっかり哲学したい。」「哲学という認識がないだけで、実は深く考えることもあると思う。」「哲学と名付けられるから否定しているだけで、実際皆哲学を行っている。」…哲学するとは本来そうした身近な、もつと言えば自分の足元の事柄だと思えます。

2. 「哲学を考えていくということは本質を考えることである。これは机? ↓原子 ↓原子核の流れに近い。」「小学生の方がなぜ? なに? という問いをもっている。」「小学生はあらゆることに対して疑問を持つ。だから我々もそれに対応する力を身につける必要がある。初等科社会に哲学は必要。」…小学校の教員も子供のような心をもって疑問を持つべきだと。「哲学するのは早い方がよい。考えて考えて答えが出ないのが当たり前。考える時間とその行為に意味がある。」「小学生には小学生なりの考えることがあって、その深め方を身につけることで、自分の振る舞い方が分かると思う。」…一般的な

答えがない哲学の問いに対し、自分なりの答えを自分が納得するまで考えることが教育的にとっても大切だと。「哲学は必要。人生の中で悩み苦しみ考えることが必要となる時が必ずあるから。」「先生である前に一人の人間として必要。」「最後の女性の意見を聞いて必要の側に変わった。教科の知識だけでは先生はできないと確かに思った。」「教師になる者として、物事の本質を常に考える必要があると思う。本質が分からないことを子供に簡単に教えるような姿勢であってはならない。」…人間として、教師として哲学は不可欠だと。「教師は子供たちの悩みなどの相談を受ける立場にある。その準備として初等科社会で哲学を学ぶ機会が必要。」…子供の悩みに対するには、自分自身が人間について深く考えていることが必要ということですね。「私は必要だと思ふ。必要ないと判断するにも考えることが必要だから。」…なるほど。これは一理ある。以上は必要派。

3. 「今自分がこの授業を受けていることが必要でなくなるかもしれない重大な問題でした。」…よくぞそこに気付いてくださった。それについて「初等科社会で哲学は不要だと思ふ。初等科〇〇はあくまでその教科について学ぶものである。」「佐野教授が初等科社会で哲学を教えているということは哲学が必要だということではないか。」…それはどうかかな? 「この授業を受けてこれまで以上に哲学って何かやばいと思っ

た。」…そうかもしれない。

4. 「挨拶について考えた時人間は自分中心の考えをすると感じた。挨拶は相手のためでもあるが、今日のまともで自分のためという要素が強く感じられた。」…鋭い嗅覚です。「生きる意味を問うのが哲学ならば、そんなものは分かりきっているため必要ない。生きる意味などありません。そもそも誰にとつての意味でしょうか。周りの人？人類？地球？そんなもの個人の主観です。意味がないと生きていけない人は死ぬばいと思います。私たちは在るように在るだけで、是非を問うものでも意義を問うものでもありません。」スゴイ！「結局初対面とはどういうことでしょうか？」…まず対面(出会い)ということについて考えなければなりませんね。「考えるとは何ぞや？」…これは自家撞着的な問いですね。

コメントの冒頭にも述べてあるように、私の予想以上に学生は哲学に好意的である。私に氣を使ってくれたのかと思うのだが、どうもそうとばかりは言えないようだ。1のコメントから読み取れるのは、①「哲学」と聞くと堅苦しいイメージがあるということ、しかし②哲学するということとは実際にはそれと気が付かずに行っていたということ、③哲学することは学生にとつて頭をフル回転させるものだということ、④哲学することは、学生にとつ

て興味深いものであること、などであろう。

①については他の講義で哲学のイメージを学生に尋ねたことがあり、その際の結果とも重なる。哲学のイメージとは、まずはソクラテスやカントなどの思想家の思想であり、堅苦しくて難しいものだということ、簡単なことをわざわざ難しく考えることなどであったように記憶している。要するに哲学とは彼らにとつてはイメージ的に別世界の、しかも特に必要のない事柄なのである。③も学生からよく聞く感想である。頭が痛くなるという感想を頻繁に聞く。彼らが単純に不勉強だったとは思えないから、どうも彼らは哲学するという仕方での頭の使い方をして来なかったのではないか、という疑念を持たざるをえない。それにも拘らず哲学という言葉のもとに意識はしていないけれども、実際には彼らは独自に哲学をしていたこと、しかも彼らにとつては哲学することが興味深いものであること、もつと深く考えてみたくなるというような類のものであること、などが浮かび上がってくる。

ここで我々教員が提供しようとしている教育ははたして学生が本当に必要としている思考の要求に込えているのだろうか、という疑念が起こってくる。私も崇高な哲学者の思想を、分かりやすく、しかもその思想的レベル

を落とさずに解説することを、哲学を専門とする者の教育的使命として考え、西田やハイデッガーのテキストに書かれてあることの根本を何とか伝えようと懸命になっていた経緯がある。こうしたアプローチは決して間違っているのではないと今でも確信している。こうした堅実なやり方を通じて自ら哲学することへと赴く学生も決して少なくないと思う。しかしそれでも学生が本当に必要としている哲学の要求とのギャップはやはり認めざるをえないのではないか。ハイデッガーや西田の思想はハイデッガーや西田の思想であって自分には関係のないこと、単なる知識や理解の事柄であると捉えられる傾向はどうしても否定できないのではないか。もつと彼らの哲学の要求に直截に応えるやり方はないであろうか。それは偉大な思想家の思想を紹介するというやり方ではなく、そうした研究を踏まえたうえで、学生の哲学への要求の中へと入って行き、そこで共に哲学するというやり方であろう。こうしたやり方は極めて不安定なものとならざるをえないだろう。学生の哲学への要求は具体的であり、決して一様ではない上に、教員の哲学がその都度問われることになるからである。しかしそれでも上に述べたやり方とは別にこうした仕方での哲学教育があってもよいのではないか。いやそうした哲学教育の在り方は必要では

ないのか。私は対話形式を導入しながら哲学講義の在り方を根本的に改造し始めたのは、おそらくこうした思いがあつたからであろう。

コメントの2から浮かび上がってくるのは、何だろう、何故だろうという子供に特有な知的好奇心に応えることができるような、言わば子供向けの哲学が子供には必要であり、それに応えることのできる素養が教員にも要求されること、子供にも答えの出ない問題を考えることの意義を見出させる必要があること、子供を人間的に教育する前に人間として、あるいは子供を人間的に教育するために教員として哲学が必要であること、このようなことを考えている学生がいるということである。哲学に対する要求や期待は予想以上に大きいと考えなければならぬ。

このことを逆に証明するのが、3で紹介したような初等科社会に哲学は不必要とする意見が極端に少ないということである。これには本当に驚いた。彼らの哲学への要求は、自分自身に対しても子供に対しても大きいと考えなければならぬ。実際4のコメントに見られるように彼らの思考はすでに哲学的である。

第2章 平成23年12月13日（火）第2回講義

第1回講義の目標は何より哲学することへの導入（ガイダンス）である。学生は哲学することを自ら体験することを通して、哲学（哲学すること）とはどのようなものであるか、についてのイメージを自分なりに持つことになる。さらに「初等科社会に哲学は必要か」という形ではあるが、哲学と人間、哲学と子供、そうして哲学と自分との関係を考えること、これが第二の目標であった。この二つの目標は何とか達成できたのではないか。問題はある。何と言っても問題は学生の対話相手である自身の哲学の程度である。一体どのようなレベルの哲学的な素養で対話をしているのか。極めて幼稚でナイーブな議論をしていないだろうか。全く恥ずかしい限りであるが、これはこの報告を読まれた諸賢のご批評をいただきながら自らを批判して行くよりほかはない。

第2回講義の目標は学生が自ら哲学的な問いを立て、自ら哲学することである。第1回講義のコメントを紹介する前に、前回の「初等科社会に哲学は必要か」について学生に一言述べておく。

「初等科社会に哲学が必要かどうかは、私にも分からない。そもそも哲学が社会科に属するのかどうかも分からない。小学生にも小学生向けの哲学が必要なのか

どうか、小学校の先生になる人に哲学が必要なのかどうかも分からない。この問いは問いとして皆さんの中で温めておいてほしい。そうして教壇に立った時、やはり哲学は必要だと思ったら、そのことを現場の声として主張してほしい」

そう言っただけでとりあえずは初等科社会の授業で哲学をやらせてもらうことにして、第1回講義のコメントの紹介に移る。紹介し終わった後に次のように学生に向かって切り出す。

「まずこのプリントをじっくり読んでください。そうしてここで問われるべき哲学的な問いを捜してごらん。見つかったらそれをyes/noで答えられる形にしてね。後でみんなにその問いについて哲学してもらおうから。例を挙げてみよう。プリントの4のコメントだったら『生きる意味はある。yes/no』という問いが考えられるね。さあ、今から少し時間をあげるから5人前後のグループを作ってディスカッションしてください」

この講義の受講者数は79名だ。15グループほどができるはずである。1班から15班まで番号で名前を付ける。

「問いは一つの班につき一つにしましょうか。それとも二つまでとしましょうか。15班あるけど、どう思い

ます？（一番前の学生に尋ねる。）そうですね。一つの方がいいみたいだね。それでは問いは各班につき一つだけにしてください。後で代表者に前に出てきて黒板に書いてもらいます」

しばらくして代表者に黒板に各グループから上がった問いを板書してもらう。それを眺めて、本質的に同じ問いはないか、学生に尋ねる。あちらこちらから声が上がると本質的に同じ問いは一つにまとめる。以下はその結果である。

- ① 1, 5, 8班「哲学をするのは早い方がよい。yes/no」
- ② 2班「初対面（はじめまして―佐野）とは意図して相手と顔を向かい合わせる時に用いる言葉である。yes/no」
- ③ 3班「コメントの一部を抜粋する必要はあるのか。yes/no」
- ④ 4, 9, 10班「教師になるものに哲学は必要である。yes/no」
- ⑤ 6班「悩み苦しみは考えれば解決できるか。yes/no」
- ⑥ 7, 14班「考える必要はあるのか。yes/no」
- ⑦ 11班「何も考えていない人間は軽い。yes/no」

⑧ 12班「哲学を考えていくことは本質を考えることであるのか。yes/no」

⑨ 13班「挨拶は自分のためか。yes/no」

⑩ 15班「佐野先生は私と対面しているか。yes/no」

私が予想していた問いは以下のようなものだった。

- a 「小学生に哲学は必要？yes/no」
 - b 「小学生を教える者にとって哲学は必要？yes/no」
 - c 「人間は自己中心的？yes/no」
 - d 「われわれは対面している（出会っている）？yes/no」
 - e 「人間が考えることと犬が考えることは同じである。yes/no」
- これを学生が板書したものと比べると、aは①に、bは④に、cは⑨に、dは⑩に対応している。eは私が問いをyes/noの形に無理にしたもので、もとは人間が考えることに関する問いであるから、⑤⑥⑦⑧に通じるかもしれない。②はグループ内で「はじめまして」とは何かについて哲学した形跡がみられる。実に面白い。③の意図は今一つつかめないが、学生の提出した問いはそれぞれに哲学的議論を巻き起こすに足る問いである。さて各グループの問いを整理した後に、例に挙げた
- ⑪ 「生きる意味はある。yes/no」

も含めて、クラス全体でどのテーマを扱うか、挙手させ多数決で決めた。TAのノートには票数が記録してある。それによると、③〓3票、④〓4票、⑦〓16票、⑨〓6票、⑩〓2票、⑬〓圧倒的多数(③の意図を挙手に先立つて明らかにしておく必要があったであろう。)

生きる意味を問う問いにこれだけの票が集まったことにやはり驚いた。これには学生コメント(「人生に意味などありません。」)の表現の強烈さが影響していたのかもしれない。そう言えば「考えない人間は軽い」というコメントもかなり強烈なインパクトを与えていたように、これに関する問いにも16票集まっていた。次に票を集めたのが、エゴイズムの問題(6票)である。学生の関心の中心がどこにあるかが表出している、そうした結果と言えるかもしれない。

こうして討論テーマは「生きる意味はある。yes/no」に決まった。直ちに次の指示を与える。

「まずはグループでディスカッションして頭をほぐしましょう。グループ内が一方の意見に固まってしまつたら、誰かが反対の立場に立つてディスカッションしてください」

しばらくグループディスカッションをした後、全体討論に移る。

「これも発言しやすいようにディベート形式にしましょう。本心では意味があると思つていても、ないという立場に立つていただいで結構ですよ。それでは訊きます。『生きる意味はある。』yesの人は手を挙げて(多数)。noの人は? (そこそこ)。どちらでもないと思う人は?(少数)。では指名しやすいように席を移動しましょう。yesの人はこちら(左手)。noの人はこちら(右手)。どちらでもない人はこの辺り(真ん中)。それでは始めましょう。まずは『生きる意味がある』と思う人から訊いてみましょう。どうして意味があると言えるのですか? はい、その方」

「人間は誰かを支えるために生きています。全てはその積み重ねで存在しているから全ての人に生きる意味はあると思います」

「なるほど。『支え合うことで全てが存在している』というわけですね(この言葉を板書する)。それでは不必要な人は一人もいないということですか?」

「いません。たとえ悪であっても、他の人がそれをよくないと思うことで、人類の進化発展のために役立っていると思います」

「それでは『無党派』の反論を聞いてみよう」

「先生、時間です」

またしても時間を忘れていた。この続きは次回ということで、学生にコメントカードへの記入を指示して第2回の講義を終える。以下は第2回の講義に対する学生のコメントとそれについての私のコメントである。

平成23年度第3回初等科社会資料

皆さんよせばいいのに、深刻なテーマを選びましたね。ではコメントの一部を生きる意味に絞って紹介させていただきます。その前に一つだけとても素直な意見があったので。

「哲学するには自分だけで考えるのではなく、グループで話し合い、互いの意見を交換する中で認め合い、自分の中で意見を再構築することが大切だと思った。その中で自分になかった考えに触れることができるし、自分の考えを深め、広げることができると思う。これからも哲学していろいろなことを考えていきたい。その答えが見つからないとしても…いい文章でしょ?ではまず例のコメントに対する反論から。例のコメントとはこうでした。「生きる意味を問うのが哲学ならば、そんなものは分かりきっているため必要ない。生きる意味などありません。そもそも誰にとつての意味でしょうか。周りの人?人類?地球?そんなものの個人の主観です。意味がないと生きていけない人は死ねばいいと思います。私たちは在るように在るだけで、是非を問うものでも意義を問う

ものでもありません。」

1. 「意味がないと生きていけない人は死ねばいいと言った方にちよつと疑問があります。その人がそう(意味がないと—佐野)思うことも、結局はその人の主観(しかも結構偏つた)であつて、『在るように在る』とはそう(すべて主観的と—佐野)いうことでは?」「よく考えてみたら、このコメントさえ、個人の主観なのではないでしょうか。…これは論理的にはどういうことになるのでしょうか。人生に意味があるのか、それともないのか?」「木曾の『支え合うことで全てが存在している』ことより、そうでないと『在るように在る』ことはできない」木曾の答えは素晴らしい。…私も気付きました。これは上のコメントに対する反論になっているのです。さて支え合っているという場合、その存在がなくてはならないものであることは理解できますが、その存在にどのような意味があるのでしょうか?授業中では悪人にも意味があると言うことでした。その悪人には悪事を為したという意味しかないのでしょうか。次に「支え合っている」以外の派の根拠を聞いてみましょう。

2. 「人は必ず誰かに愛され必要とされている。ある意味では『生かされている』のかもしれないと思つた。」「私は何のために生きているのか考えると、何もない。生かされて生きているのだと思う。」「私たちは生かされているのではないか

と思う。意味というよりは使命を持っている。…これらは上の「支え合う」に通じるものがあります。

3. 「生きる意味はあると私は思う。その具体的な意味は人それぞれだと思う。」「十人十色の生きる意味を個人が人生の中で見つけられたら、生きる意味になると思います。見つけられない人なんていません。…生きる意味を一人一人に着目して述べています。

4. 「生きる意味は自分で見出すものであり、生きる意味がないという人はそれを見出そうとしないだけである。」「生きる意味は生きる意味を見つることだと思う。」「意味を捜しながら生きていくこと自体が尊い。…これらは2や3とは少し理由が違うようです。

5. 「食べたい、眠りたい、という欲求を満たすために生きる。」「人間は芸術表現などを通して自己表現しているので生きる意味はある。」「喜びや悲しみを感じる。」「自分が死ぬと悲しむ人がいるので今はそのために生きています。…これらは4における生きる意味を見出したコメントでしようね（最後の人は少し微妙ですが）。次は3派です。

6. 「一人も不必要な人はいない」でも、不必要か必要かは個人の物差しであって、だれが見ても必要というわけではないと思う。私は生まれたくて生まれたわけではない。生きたいから生きているのではなくただ死ぬのが怖いから生きてい

る。これは意味ではなく、ただの理由である。」

7. 「人間は何かしら意味を見出そうとするので、生きる言い訳をするために生きる意味を捜し、生きていただけだと思う。」「生きる意味はないと思う。周りの人を支えるために生きているとしても、それは生きる目的であり、意味ではない。ただ存在しているだけで意味はない。」「生きる意味はあるのか。結局は死んでしまうのに必要なのか。…6と7は同じ3派でも根拠が違うように見えます。

8. 7の最後のコメントに通じるものとして、「私個人としては生きる意味は人それぞれにあり、その意味があるからこそ人は生きていけると思うのですが、人類全体で考えると、問題提起をした人（最初のコメント―佐野）の意見も正しいと思います。」「個人の主観からはあるとも言えるし、星の規模から考えるとないと言えるかもしれません。」「個人的には生きる意味があると思うについても社会的にあるかと考えると、どうなのかなと思った。例えば私がこの世にいなかったとしてもほとんど何も変わらないだろうし。だから視点によつて意味があるかないかは変わらぬと思う。…最後に

9. 「生きる意味について考える必要はあるのですか。『ない』という結論で落ち着くことはあるのでしょうか。勉強に意味がないと言われて学びますか？それと一緒では？」…この論法でいくと、意味がないと本当に思っている人は生きるはず

はない、死ぬはずだということになりますね。人間は無意味ということに耐えられるか、という問題にもなります。

このコメントの分類には明らかに意図がある。というより私はある意図に基づいてこの分類を行っているのである。次の講義ではこの「意図」に気付いてもらいたいがために、自分ではかなり露骨にこの「意図」を前面に出して分類をしたつもりだった。そうして当初第3回の講義は次のように進めるつもりだった。

第3回の講義の目標は、一つは彼らを「生きる意味はあるか？」という問いにさらに直面させること。つまり人間は無意味には耐えられないということを自覚させると共に、さらに「本当に意味はあるのか？」と追い込むこと。もう一つは「生きる意味」を考える「視点」の混在に気付かせること。この二つだった。その上でもう一度基本コメント（「人生に意味などありません」と言った学生のコメントをこう呼ぶ）とその反論に返って考えてみるというのが大体の流れだった。

私の講義ノートには次のように指導案が書かれている。

まずコメント9（人間は無意味ということに耐えられるか）

から考えよう。

（次に）コメントはいくつかにグループ分けできそうだとグループ分け1

①基本コメントに対する反論…1

②yes派…2, 3, 4, 5

③no派…6, 7

④yes派でもno派でもある…8

⑤その他…9

別のグループ分けもできそうだと。どのような視点で分類できるか、考えてみよう。（グループディスカッションで、基本コメントも含めてコメント8を参考にして分類させる。）
予想される分類

両方の視点	自分にとっての視点	全体にとっての視点
8	4, 5, 6	基本コメント、1, 2, 3, 7

基本コメントとその反論（コメント1）に返って考えてみよう。

この通りの講義を行えばよかつたのかもしれない。実際の講義では私はもう少し欲張つた要求をしてしまった。以下は実際の講義の概要である。

第3章 平成23年12月20日（火）第3回講義

コメントの紹介を済ませた後、予定通りコメント9をもとに「人間は無意味に耐えられるだろうか」という問いを学生に投げかける。

「ギリシヤ神話にもあるが、これを少しアレンジして君たちに訊いてみよう。（ある学生に向かつて）君は捕らわれの身だ。私の言うことを聞かなければ命はない。そこで私は君にあるものを作れ、と命ずる。君は言うことを聞いて作るね？」

「はい」

「君は一生命を作る。出来上がったら、『先生、できました』と持ってくる。そこで私は『よし。では今作ったものを壊せ』と言う。これを永遠に続けさせられたいらどうだろうか。君は耐えられるだろうか」

「耐えられません」

「人間は苦しみには耐えられる。どれほどの苦痛であろうとも、それが何のためかが分かっているならば、耐えられる。しかし人間は無意味には耐えられない」

どこかで「シジフォス」という声が聞こえる。ギリシヤ神話に詳しい学生もいるようだ。もうひとつ例を挙げる。

「君が大切な人を出がけに何かの用があつて少し引きとどめたとする。それでその大切な人がたまたま交通事故に巻き込まれ命を失つたとする。引きとどめなかつたから交通事故に巻き込まれたことだつてありうる。つまり交通事故に遭うということは、無数の原因というものはありうるだろうけれども、結局はやはり『たまたま』、つまり偶然だということだ。しかし大切な人が偶然死んだ、ということに人間は耐えられない。その死の無意味さに耐えられない。全ては自分の所為（せい）だと考えた方がまだ楽なのだ」

もうひとつ、今度はこの世で生きる意味を本当に失つた人は、自殺をするか、自殺をしないまでも消え入るように死んでいく、ということ、実例を挙げながら説明する。人間にとって「生きる意味」は決してどうでもいい問題ではない、このことを改めて自覚させる。

そこで問題となるのは「死ぬのが怖いから生きている、というのは生きる意味を見出しているのか」という問いである。このコメントの主は「死ぬのが怖いから生きているのは、理由であつて意味ではない」と言っている。つまり生きる意味を見出してはいない。しかし先に述べ

た論法からすれば、生きる意味を失えば人間は生きてはいけない。その意味ではこれは「人間は意味がなくても生きていける」と主張しているのだから、先の私の主張に対する反論となっている。私の考えでは、「死ぬのが怖いから生きている」という「理由」も、当人にとつては立派に意味として機能しており、しかもこうした意味付けは、恐怖や不安を避け、安楽を選ぶといった人生観から来ていると思われるのだが、講義中はそこまで立ち入って考えることはできなかった。それでも何となく違和感があったので直截に「死ぬのが怖いから生きている、というのは生きる意味を見出しているのか」という問いを学生にぶつけてみた。これもyes/noで挙手してもらった。即興の問いである。

その結果は私の予想に反し、見出している派が少数で、見出していない派が多数であった。ついでその根拠を尋ねる。見出していないとする根拠は、「死ぬのが怖いから生きている」というのは理由であつて、意味ではないという先のコメントの主と同じものだった。これに対し、見出しているとする根拠は、生きることにこだわりがあるなら、それが生きる意味だ、死ぬのが怖いというのは意味そのものである、というものだった。

ここでは意味と理由の概念の曖昧さが浮き彫りとなつ

ている。私は「死ぬのが怖いから生きているという理由で生きている人生に何の意味があるのか」と問うこともできる、という仕方だ、こうした考え方も「生きる意味」への問いに直面させ、追い込んでいこうとした。しかし意味と理由を峻別し、意味はなくても理由があれば生きていけるとする多数の学生にとつてはピントのはずれたものになつていたはずである。やはり意味と理由について主題的に問うべきなのである。このことは後に顕在化する。

次に私のしたことはコメント8に関連して、全体的な視点から見た時の「生きる意味」について彼らを追いつくことである。それに対して先の考察は個人的な視点に立つて、理由を意味へと追い込むものだったと言える(うまくはいかなかったが)。次のように切り出す。

「全体から見た時、人生の長さもポウフラの命の長さもあまり変わりはないのではないか。(ポウフラが何か分かっていない女子学生が幾人かいたので、急遽ポウフラを泡に変更する。) パツと生まれてパツと消える泡の意味はあるのだろうか。それらの一つひとつはあつてもなくても同じものではないだろうか。こういうあり方と人間はどこか違うところがあるのだろうか」

「人間は泡のように偶然生まれてきたりしません」

「本当にそう思っているのですか？一度の射精で1億から3億の精子が出されるそうだ。どうして隣の精子ではなかったのだ。そこに何か必然性があつたというのだろうか。お父さんとお母さんが結婚したというのだから、仮にお父さんに以前付き合っていた人がいたとして、どうしてその人でなかったというのだ。もしその人と結婚していたら、君は今いないことになる。つまり適当な条件下で、パツと出てパツと消えるという点で、泡も人間も選ぶところはないということになる」

〔学生困惑〕とTAのノート）

ここから予定では学生コメントにおける視点の混在に気付かせるプログラムに入る予定だったが、何故かその時、視点の混在が哲学的に問われるべきものであることを学生自身に指摘させようと思ひ立つて、次のように学生に指示を出した。

「それでは第2回講義のプリントをよく読んで、哲学的に何を問わなければならないか、グループディスカッションで話し合ってみてください」

予め問いがよく練られていなかったためであろうか、この指示は学生に少なからず混乱をもたらしたようであ

る。今回は4人平均のグループ、全体で17グループ。前回同様、代表者に一つの問いを板書してもらい、その後全体で本質的に同じ問いはどれかを尋ねて問いをまとめいった。以下はその結果である。

- ① 1, 9, 16班：「我々は生かされているのか。」
- ② 2, 8, 10班：「人は何故無意味に耐えられないのか。」
- ③ 3班：「無意味が好きなのはどうすればよいか。」
- ④ 4, 6, 13班：「意味、理由、目的の違いはあるか。」
- ⑤ 5班：「(人間は) 欲求を満たすために生きるのか。」
- ⑥ 7班：「生きる意味を考えることは必要か。」
- ⑦ 11班：「生きることは使命か。」
- ⑧ 12班：「人は誰かに愛されているか。」
- ⑨ 14班：「生きることの意味がなければならぬのか。」
- (ノート) 「生きるため意味をなさないといけないのか。」
- ⑩ 15班：「生きる意味を客観的にどう定義するか。」
- ⑪ 17班：「健康とは何か。」

学生の苦心のほどが窺える。しかしこれを見た当初、無理に作られた問いが多いように感じたので、私は次のような注意を与えた。

「無理やり作られた問いは問いではない。事柄、今回

の場合はこのプリントが透き通る位に読み込んで、そこから自然に湧き上がってくるのが問いというものだ。それまで『待つ』ということが大切なのだ」

哲学的な問いに行き当たるためにはそれなりの手順が必要だ。それもしないで思いつきで「問え」と要求した私の方に非があると今では思っている。学生のコメントに「無理に作られた問いが問いではないことはよく分かります。しかし決められた時間では仕方がなかったのです」という苦情があった。相当苦心したのだろう。しかし改めてよく見るならば学生はよく考えている。

私がこの時予想した問いは、プリントで露骨にそれと分かるように分類した（つもりだった）視点の違いに関するものと、先程問題になった意味と理由、あるいは目的に関する問いであった。④（4, 6, 13班）と⑩（15班）はまさにそれに言及している。②（2, 8, 10班）③（3班）⑨（14班）は「人間は無意味には耐えられない」とした私のコメントに反応したものと考えられる。①（1, 9, 16班）⑤（5班）⑥（7班）⑦（11班）⑧（12班）はプリントの全体を読んで浮かび上がってくる問いというよりは、プリントの中から哲学的な問いになりそうなものを苦心して搜したといった感じである。⑪は何を意図したのかよく分からない（これもきちんと言わなければならない）

であろうができなかった。

次に全体で黒板に書かれた問いの検討に入った。この過程で、意味と理由、目的の違いが学生自身によって明らかにされていったのである。それによるならば、理由とか目的は個人が設定するものであり、主観的なものであること。これに対し、意味は意義とほぼ同義で、価値とも言い換えることができるものであり、客観的なものだと言うのである。こうした意味の振り分けが正しいのかどうかは議論があるだろう。しかしこの振り分けが視点の違いを前提していることは明らかである。そこで私はおおよそ次のように学生に言って第3回の講義を終えた。

「君たちの言う理由・目的と意味との違いは主観と客観、あるいは個人と全体の視点の違いを前提している。ここで問題は基本コメント、およびそれに対するコメント1に返ってくることになる。基本コメントは社会や人類、地球という視点でさえ主観的だと言っていた。その上で人生に意味などないと言っていた。それに対するコメントはそうした考えすら主観的だと言っていた。ここをいったいどう考えたらよいのか」

以下は第3回講義に関する学生のコメント、およびそれについての私のコメントである。

前回の課題は、第3回の資料を読んで「哲学的に問わなければならぬことは何か」ということでした。そのことについて「問いとは無理矢理作るものではなく、事柄（今回はプリント）が透き通るまで読みこんで、自然に起って来るのを待つ」ということを申しあげました。授業時間内に板書された問いに比べ、皆さんのコメントでははるかに哲学的な問いが熟しています。問うべき問いを問う、これが哲学する上で最も大切です。第3回の資料をもう一度ご覧ください。1では全てが主観だとする意見に対して、木曾説を誉めたコメントはそうした主観さえ支え合ってしか存在しえない、と主観を超えた視点から反論をしています。ここにすでに視点の違いが出ています。2と3の視点はどこにあるでしょうか。4、5はどうでしょうか。ヨ派でも6と7の人ではやはり視点が違うようです。8では二つの視点を区別して論じています。ここではまずこの視点の問題を問わなければならないでしょう。講義ではさらに意味は意義や価値と置き換えられて、これが理由や目的と区別され、これが先の視点と重ね合わせて考えられました。つまり理由・目的⇨主観的、意味・意義・価値⇨客観的ということでした（もちろんこれが正解というわけではありませんよ）。そこでさらに全ては主観的なのか、

二二二
そうでない客観的な立場に人間は立ちうるのか、という問題が出てくるはずですよ。この辺りを皆さんはしっかりと捉え始めたようです。ではコメントの紹介です。例によってほんの一部で申し訳ない。

1. 「最後にこのテーマにはいろんな視点が混在していることに納得した。主観的に感じる意味と客観的に感じる意味に混乱してしまつた。…この気付きが重要ですよ。「視点がいくつもあるなら、場合を分けて考えてみるべきじゃないのか。そして矛盾や相克のないものを探すべきではないのか。」…さすが数学者。

2. 「生きる『意味⇨意義』というのは外部に求められるものであり、理由・目的というのは内部に出来上がるものだと思う。」「本人の立場から考えれば、『死ぬのが怖い』というのは生きる意味になつていますが、意味⇨意義と考えるなら、その理由では生きる意味にはならない。…つまり『死ぬのが怖いから生きています』ことに何の意味があるのか？と問われるわけですね。「意義で考えると、この世に生きる意義をもっている人なんているのかな、と思ひました。」「私は自分の主観として生きる意味はあり、その意味は人それぞれであると考えていました。今日の講義で、全体としての生きる意味はあるのかと考えた時、考えても考えても答えは出ませんでした。あると言えば、それは何か出てこないし、ないと言え

自分の存在が何だかあやふやになるようで。」「人の生には意義があると言われると、それこそ無意味に耐えられない人の弱さが生み出した願いにすぎないのではないかと思っています。」…基本コメントの方のコメントです。全く逆の考え方をする人もいました。「生きる意味を考える時、自分の視点からだとないという人が多いのではないか。ネガティブ志向の人や、辛いことがあつた人などは特にそうだろう。全体の視点からだと、生きる意味はあると思う。意味がないと思うと、人生の目標を失い、何に対してもやる気を失ってしまうと思う。視点が重要だと学んだ。」…同じ全体視点に立つても全く世界観が違うことが分かります。次はこうした全体視点に立つことに対する疑問です。

3. 「社会全体の視点に立つてという前置きも、その人の主観的な、社会について考えた結果の想像における視点なので、そもそも人間である以上、正確には個人の視点の域を出ないのではないか。」「一個人が全体（人類）の普遍的であり、絶対的な意味を見出そうとすること自体が不可能であり、傲慢であると感じた。その人が『これが生きる意味だ』と思ったならば、他人が干渉する余地はないだろう。」「最終的な生きる意味は個人の主観によって決められ、それぞれに生きる意味を持つていないのでしょうか。」しかしこうなると、4. 「あること一つをとっても感じ方は人それぞれだから、

何もかも主観的だと思えます。だから何をテーマにしても色々な答えが出てきて一つにまとまることはないと思います。哲学とはそういうものなんですな。」この問題の答えはこれを考えている人の数だけあるのではないか。「人それぞれ違うため、今まで話し合ったり考えたことが無意味に思えてきた。」「生きる意味について話し合う必要はないと思う。考え方は人それぞれだし、意見が割れるのは当たり前。」…ということになりそうです。それに対し「ただ単に主観的な考えというだけで片付けるのは話し合いを止まらせてしまおうと思います。主観的になるのは当たり前だと思うので、それを踏まえたうえで話し合えばすべきだと思います。」…さて「全ては主観的な意見である」。こういうところに落ち着くのでしょうか。生きる意味は有ろうが無かろうが、有るとしてもそれがどのようなものであろうとも全ては個人の主観的な考えにすぎない。こういう結論でよいのでしょうか。さてここで3つの戒めと1つの誓いを思い起こしてください。分かった気になるな！前提を問え！さあ、教わる気にならず、考えることから逃げずに哲学してください。

第4回講義は平成24年1月10日（火）である。そこで私は「生きる意味は有ろうが無かろうが、有るとしてもそれがどのようなものであろうとも全ては個人の主観的

な考えにすぎない」、ここから出発しようと思う。人間は全てを意味付けしようとする。無意味というのの意味づけだ。その意味付けは常にその人間の視点からなされたその人間の理解（考え）だ。人間の理解は常に自己中心的、すなわち主観的である。しかしそれと同時に主張されなければならないのは、そうした理解が主観的である限り、それが真理ではないということである。我々は人生についての理解を持っているが、人生そのものを知っているわけではない。この〈○○〉についての理解と〈○○そのもの〉あるいは〈○○の真理〉の区別は、全ては我々の主観的な考え（理解）だという主張のうちに厳然として存在している。ところで我々が人生とは何かという問いに向けて探究できるのは、我々自身が、理解がそこから起って来る理解以前に開かれているからである。意味について言うならば、我々は意味無意味として意味付けられる以前に開かれているからである。

もうひとつ明らかかなことは、主観的な理解すらも、さらには主観そのものも無限の縁によって成立しており、決してそれだけで存在しているのではないということである。こうした意味無意味以前、理解以前、主観以前を論ずる視点はもはや個人的な主観ではない。我々がこうした視点について論じうるのは、人間がそうした領域に

開かれているからである。とはいえ我々がこうした視点に立つて論じようとするや否や、そうした議論の全体はまたしてもその人間の理解であり、主観ということになる。このようにして主観は主観ならざるものを通じて主観であり、主観ならざるものは主観を通じてそうしたものとありうる。こうしたことを学生との対話の中で、折を見て佐野説として、いつも通り疑わしい説として赤字で紹介したいと思う。それを叩き台として学生はどのようなレポートを書いてくるだろうか。これが学生主体の対話形式のうちで、教員が研究に基づいて自説を積極的に展開する講義形式をとった哲学教育の一つの在り方ではないかと目下のところ考えている（1）。

平成24年1月5日

注

（1）第4回の講義（平成24年1月10日実施）は「全ては個人の主観にすぎない」から出発した。グループ討論を通じてその前提を問うことを指示した。全体討論では導かれるようにして様々な意見が哲学的な問いを通じて収束していった。ここではあの「基本テーゼ」の学生がこの講義を通じてどのように考えるようになったかを紹介したい。というのもその文章が無駄な力が抜けていて、

端的に美しいと感じたからである。

自分の生きる意味についての考えは、最初の講義と、次々の講義で書いたものから変わっていません。人生に理由があっても、意義はない、という考えのままです。しかし、今の私は以前の私と違い、この考えが100パーセント正しいとも、また自分の考えはこのままでいいとも思っていないません。それは先生が最後に仰った、人は人生を永遠に「解る」ことはできない、「解った」と思った時点でそれは主観。だからこそ探究の余地がある、という考えに納得させられたからです。

最初の授業で自分の考えを書いた時は、まさに自分にとってはその考えが当たり前で、論ずるまでもないと思っていました。常識や何かの受け売りをしたのではない、他ならぬ、自分で考えた末の結論だったので、自分はどう哲学をしている、という慢心があったのかもしれませんが。次々回に自分の意見に対する他の方々の意見を読むのはやはり楽しかったです。自分の伝えようとしたことがよく伝わっていないなど感じた時は残念な気持ちになりましたし、自分と似た考えを持つ人がいると気づいた時は嬉しく思いました。私の死生観は私の生き方にも少なからぬ影響を与えており、また中学生という時期から抱いていた起源の古い価値観であることにも手

伝って、そう容易に変わるものではないようです。しかし、これまで前述したように、今は、これで自分の価値観が固まることを良しと思っていないません。自分はちゃんと考えた。考えた末の結論だからこれは哲学であり、答えだ、という考えは間違っていたと思います。答えと思つたとたんにそれは主観に成り果て、考えることの、哲学の放棄につながるという考えはストンと腑に落ちました。自分は確かにこの教室にいる他の多数の人たちより深い考えを持っていたのかもしれない。それが他の人より「哲学」しているということだと勘違いをおかしていました。それに気づかせていただいたことに感謝しています。思索には終わりはないのだということがようやく分かった気がします。